

---

# クロマグロ

スグル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロマグロ

【著者名】

スグル  
た。

【あらすじ】

世の中に、絶望したある日。僕は、あのテレビ番組を見てしまった。

私は、ある日、高校をサボつた。

なんといつか、勉強するのがやだつたし、学校に友達はいなかつたし、進路を考えると頭痛がした。

だから、親に仮病を使い休んだ。

部屋で、引き籠もつて、テレビを見ていた。

すると…。

「ああー、始まりました。『お料理、萌えーー』の時間ですー！」

むかつすべりに、アナウンサーがキッチンに立ち、明るく声を出す。

そういうば、この昼の時間は、料理番組をやっているのか…。

臭いメロディや、ワイドショーには興味がなかつたので、チャンネルをそのままに見ていた。

ブラウン管の中では、アナウンサーが…。

「さあーて、今田のお料理の先生は、濁汁料理学校講師、黒鮪黒陰くろまぐろ くろかげ先生です」

なんだ、その灰汁抜きの練習が多そうな料理学校の名前…。

すると、ポップな音楽に合わせ、田の下のクマがすじい若い長髪の男がキツチンに現れた。

こいつが、黒鮪黒陰先生とやらか…。

「みつ…、なつ…、わん、こん、にちは…」

テレビの音声さんに迷惑掛かるべりいの小さい声で、挨拶した。

料理の先生にしては、暗すぎるわ…。

「先生、こんにちはーーー！」

アナウンサーが挨拶を返すと、彼はボソボソ……、となにかを呟いている。

なにを言つてゐるんだ…。

音声をなんでも、拾えない声出すなよ…。

「先生、今日のお料理は？」

話し進めちやつたよ…。

なんだ、料理番組にしちゃ暗いぞ…。

例えると、ラーメン屋で一人だけ、ざるそば食べた時みたいな…。

「今日の……お料理は……『綿棒』を焼きます……」

!?

「先生、なにを言つてゐるんですか！？？」

アナウンサーが、本気で焦つてゐる。

「耳に……入れる……奴ですよ……。鼻に……入れる……奴じゃないです……」

「そつぱんじ」とじやないです！？！」

どつちにしり、綿棒は食べれないやろが！？！

なんだよ、お前の言い分だと、耳に入れる奴は焼けば食えるのか！？！

「綿棒……嫌い……なんですか……？」

黒鮪は、残念そうに言つ。

嫌いとかのレベルじゃないだろが。

就職希望先の面接官が、そんなこと言つ出したら、ダッシュで帰る。

「じゃあ……、田玉焼きを作りましょ……」

黒鮪は残念そうに、料理を変えた。

いや、田玉焼きなんて、料理番組でやらんでもいいだ？…。

黒鮪は、フライパンに油を敷く。

そして、火を点けた。

「いいですか……、田玉焼きを作ります……」

やつと料理番組らしくなつてきた。

しかし、こいつ暗いな…。

「あの…、アナウンサーさん…」

黒鮪は、フライパン片手にアナウンサーに弱々しく声を掛ける。

「はい、なんでしょう?」

明るくアナウンサーは、答える。

「僕、こないだ…、ネズミ王国行つたんですよ…」

ああ、あのテーマパーク。

なんだよ、こいつ楽しい話題があるんじやないか。

「お友達と?」

アナウンサーが、そう聞くと…。

「一人で行きました…」

アナウンサーは、黙り込む。

テレビから音が、まつたく聞こえなくなつた。  
しばらくして、黒鮪が、卵を取り出し…。

「さあ…、焼きますよ…」

そう言つと、アナウンサーが笑顔を取り戻し…。

「あつ、はい、そうですか!はい!」

必死だ。

グッヅジョブ、アナウンサー…。

ジユウジユウ言つ、フライパンを前に、黒鮪が…。

「いいですか…、目玉焼きの醍醐味は…、黄身を割らないことです…。食べる前に、目玉焼きの黄身を割るといつ行為をするものは、オーソドックスに海で溺れればいいんだ…」

なに、言つてるんだ…。

アナウンサー、ひいとるがな…。

そう言い、彼はフライパン目がけ、卵を割つた。

ベチョッ

フライパンの上で、黄身が割れた。

7

7

テレビの中でも、一人と毛黙り込んだ。

黄身が、白身にへばりつく。

僕は、泣きそうになつた

・彼は感情のない子です 将来が不安です

と 小学校時代は 言われた儀の目から なはかが 返み上ける

「わつ、そんなつ……、いんなつ……、いんなりやう……、つゆう……、じ

やあ

爪を噛んで、ガチガチ硬直している。

呻みながら、血が止まらない

叫ゆかへ二ノ内に思ひ詠ひかへ一  
ニシテ

切めて、彼は大喜びになつた。

そして、その両親、ギッシュが立ち会って手渡す。

「先生！せんせええええ――――――――！」

アナウンサーが、大声で叫ぶ。

僕は、塞ぎ込んで泣いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8562b/>

---

クロマグロ

2010年12月31日21時10分発行